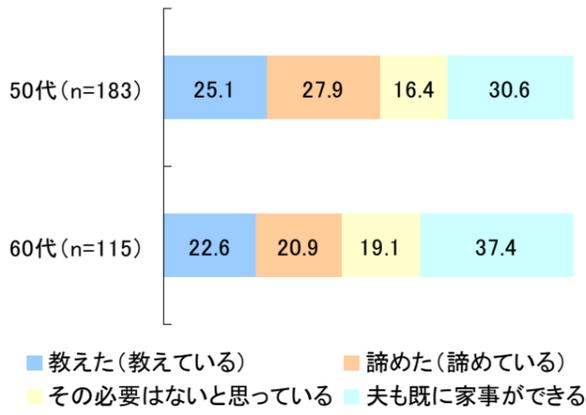


01 Woman's Voice

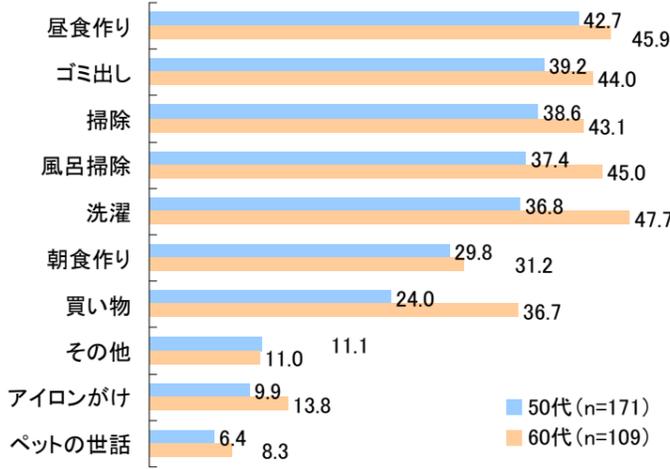
親の老後、自分の老後を考える～vol.7～

60代ミセスが夫に教えたいのは洗濯、昼食作り、風呂掃除・・・

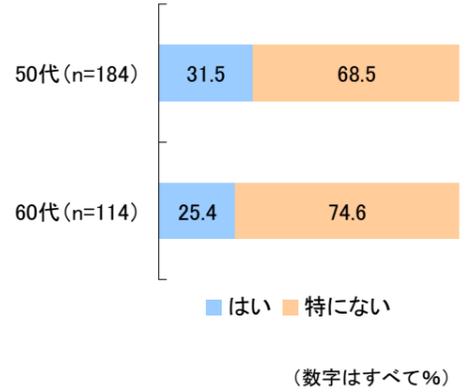
Q. あなたがセカンドライフを楽しむために、夫に家事を教えますか？



Q. 夫に教えたい家事は？



Q. 夫には任せられないと思う家事はありますか？



自分の老後を考えるシリーズ第7回はミセスのセカンドライフをより実りあるものにするために夫の家事への参加をどう促しているか、50歳以上のミセスに聞いた。別の調査で60代以上の4人のミセスにグループインタビューをした際に、夫の定年退職の2～3年前から料理を教え始めた全員が口を揃えたので、今回アンケートで確認してみた。結果、4分の1が家事を教えているが、同じくらい諦めた人もいる。意外にも一番多かったのは「夫も既に家事ができる」と答えた人で

50代で3割、60代で4割近くに上った。団塊世代以降は家事もそれなりに一緒にやってきた友達夫婦や単身赴任経験者が多いようだ。それでも夫に教えたい家事はちゃんとあり、年代によって微妙に変わるのが興味深い。50代で票を集めたのは、昼食作り、ゴミ出し、掃除、風呂掃除、洗濯の順でいずれも3割超。対して60代で最も高かったのが、洗濯、昼食作り、風呂掃除、ゴミ出しの順で4割超。60代で洗濯が一番になるのは、退職して1日家に居る夫を最も有効活用できる家事だからか。

洗濯と昼食作りをしてもらえれば、妻は朝から夕方まで出かけられるワケで、60代になると、より具体的な希望になってくるのだろう。夫に任せられない家事は特にないとする人が7割前後と大勢。少々気にいらぬ出来だって、任せないことには自分の時間が取れないからだろう。一方の任せたくない派は料理、洗濯、掃除、買い物などを挙げた。夫が粗雑な場合はもちろんだが、几帳面でも「時間がかかりすぎると、妻の目は厳しい。

所長の目

ミセスのセカンドライフの一番の期待は「家からの解放」。ところが夫が定年退職して1日中家に居るようになると、また3食きちんと作らなければならないくなって、むしろ自分の時間が減る。朝食か昼食を自分で作るなりして食べてくれれば助かる、というのが妻の気持ちだ。ここにシニア男性の食に関する新しいマーケットがありそうだ。現にファミレスなどでモーニングの時間帯にシニア男性の姿が目立ってきたそうだし、サロン風の展開で軽食を出すゲームセンターも出現している。日常料理を教える気軽な料理教室や、作った料理を振舞えるなど、シニア男性が食で活躍できる「場」が、地域に求められてくると思う。(植田奈保子)

※2012.03/15～18調査。50歳以上の既婚女性301人回答。詳細はくらしHOWへ問い合わせを

Real Voice 夫に家事を任せたくない理由

- ◆買い物は、値段を見ないで高いものを買ってくるから (54歳/専業)
- ◆洗濯は何でも一緒に洗ってしまふ (57歳/専業)
- ◆洗濯を干すのは...乾いた後の形がダメです! (55歳/パート)
- ◆掃除と食事の後片付けは、夫はきちんとやっただけでも私から見ると中途半端。結局やり直さなければならぬので二度手間 (53歳/専業)
- ◆アイロンがけは無理。でもセカンドライフになったらアイロンがけからも解放されるはず (51歳/専業)
- ◆食事を一度作ってもらったら、2人なのにたっぷり作りすぎて食べきれず、ゴミも大量に出し、しかも美味しくなかった。材料を買うのにたくさんお金も使ったのに勿体ない! (56歳/パート)
- ◆料理は自分でしたいので任せたくない (51歳/専業)

02 HOW's View

ネット上の井戸端会議をのぞいてみると生活者のナマの声、本音にヒントが

消費者は「その商品のどこが気に入って買ったのか」「その商品を実際にはどんな使い方をしているのか」。このような、数値(データ)では表すことができない行動や深層にある意見を探っていく定性調査。インタビュー会場を用意してモニターに集まってもらうのが定番だが、自宅にいながらにしてインタビューに参加してもらうシステムがある。ネットの掲示板システムを使った「おしゃべり会議」「ネットモニター会議室」だ。都心の会場まで足を運んでもらう必要がないので、小さい子どもを抱えるお母さんや、遠方に住む人でも参加できる。そして何よりも、自宅にいるリラックス感からホンネも出やすい。「冷蔵庫の中を確認してみたら...」なんてことも可能だ。当研究所のサイトでは、約50テーマの会議室を随時公開中。例えば「新商品うどんつゆのお試し会議」では「う



3月に実施した「もう春!ダイエットどうしてる?」から

どんつゆでリゾットを作った」という発言が。これには、メーカーの開発担当者もビックリ! 企業側には思いもよらない意見や、少々厳しい意見が飛び出すこともあるが、これこそがまさに生活者のホンネ。関係者だけが閲覧できる、非公開型会議室もあるのでお問い合わせを。(くらしHOW研究室長/西桂子)

03 Group Eyes

5月「チャイム」拡大発行で見えてきた小学校と教育CSR連動の方向性

近畿圏での昨年のトライアル発行が好評だった小学校の先生サポートマガジン「Living チャイム」を5月から首都圏でも発行。「先生方が授業で使える教材ページや学校という教育環境で活用できる情報コンテンツを厳選して掲載。企業の教育貢献活動(教育CSR)をお手伝いするメディアとして、ブラッシュアップさせました。トライアルで実施したアンケートで、今後のチャイムを読みたいと支持してくれた先生が97%もいたという事実が拡大発行の最大の理由」と編集長の相澤裕之。新装刊で新たに盛り込んだ企画は、企業が持つ情報コンテンツを教育現場



初夏号、首都圏版表紙

■媒体発行概要 ■発行:2012年5月9日より配布、以降9月、2013年1月、年間3回発行予定/体裁:A4判オールカラー、32ページ/部数:首都圏版102,650部、関西版51,335部/配布方法:各小学校の校長・教頭・副校長宛に発送。通常の配布ルートで各先生へ配布

に即した形で「教材化」する広告。「企業がよいコンテンツを持っていても、学習指導要領に則らなければ学校では使えません。チャイムはそれを学年・単元別に授業で使えるように編集し、学校や教科書で学んだ事柄を社会と結び付ける別アプローチで教材化します。73%が女性という特化した消費者である小学校教員への商品・サービスニーズも掘り起こせて興味深いです」。企業が持つCSRの理念はもっと教育現場に向けられてほしいし、そんな土壌を作っている媒体に育てたいと相澤は話している。(岸野順子/リビング新聞グループコーポレートコミュニケーション室室長)